

さんのお所とお名前を帳面へ書かしていただきます、役場へ届けますのんどすが、中には冗談をおつしやるお方さんがおすので、役場で私の方が怒られますので、何卒冗談を云はぬ様に一つ叮嚀に云ふていただきます」

「ア、そうか、そんなら私が云ふで書いてや」

「へエ有難うさんで、何所さんどす」

「私大阪やで」

「へエく大阪」

「東區今橋通り二丁目、鴻池善右衛門と」

「へエ、東區今橋通り二丁目、鴻池善右衛門……あの何方さんどす」

「私や……」

「あの私の方は鴻池さんは御贖負になつて居りますので、鴻池の旦那さんは宜う知つて居ります、鴻池の旦那さんはもつと能う肥へてはつた様に思ひますが」

「フム、能う肥へて居たのやが、米高が堪へてドカツと瘦せたんや」

「米高で瘦せた、御冗談ばかりおつしやつて……もう少し背が高かつた様に思ふてますが」

「背が高かつたが道中をして歩いたのでチビツて背が低う成つたんや」

「チビツた、何卒冗談おつしやらん様に……其方の旦那さんは」

「私も大阪や」

「へエく」

「米平と」

「アノ米平さんとおつしやると上町の」

「違ふ、福島羅漢前米搗きの平兵衛で、米平や」

「ほんに、こら人相してます」

「阿呆云へ、其方へ行け」

「其方の旦那さんは」

「おいどんは鹿兒島縣鹿兒島市本町通り二丁目十六番戸、西郷隆盛ぢや」

「西郷隆盛……そんなお方はおへんどす」

「そんなら西郷ひくもりか」

「何卒なぶらん様に、其方のお女中は」

「妾は照手姫」

「お女中までなぶつてなはる、其方のお婆さんは」